抑留記

滋賀県 福井 源三朗

私は滋賀県八日市岡田町で、大正十三（一九二四）年二月二十三日、貧農の三男として生まれた。

昭和十二（一九三七）年七月、支那事変が勃発して戦争が激しくなってきた。

昭和十三年四月、大阪市西区の亀守洋紙店に丁稚奉公に出た。

昭和十八年六月、徴用令状が来て愛知県の豊川海軍工廠に入廠。

昭和十九年八月、徴兵検査で甲種合格となる。同年十二月、満州第六一二部隊に現地入隊の召集令状が届く。

当時B 29による空襲が始まったばかりで相前後して東海地震が起きた。内地といえども安全ではないと思われた。

入隊は二十年三月五日広島西練兵場に集合である。滋賀県からの入隊者約三十人は三月四日大津駅前の旅館で一泊して、県の職員の見率で三月五日広島の旅館に着く。夕方になって満州より初年兵引取りのため戸田軍曹が来られた。戸田軍曹より入隊に関して注意事項等の説明を受け、軍人としての心構えの訓示を受けた。私は環陣砲兵隊第一中隊である。

翌六日身体検査並びに被服の着替えを終わって、その日の夜広島を発ち、七日朝博多に着いた。その日に小型の船に乗って玄界灘を渡り釜山に上陸した。釜山より列車に乗り北満の環陣に向かった。車内から見る朝鮮半島は赤茶色のぼげ山が多く感じられたのが、今も記憶に残っている。列車は北へ北へと進んで行く。列車の窓は二重ガラスになっていて、窓ガラスが曇らないような仕組みであった。ハルピンを過ぎた頃から雪景色が濃く感じられ、一段と寒くなったような感じがあった。

列車は三月十二日朝、環陣駅に到着。古年兵の出迎え受け、地下足袋を防寒靴に履き替えて環陣陣地へ向

かう。一時間ほど歩いて小高い山の入口に営門が見える。営門を通り抜けて我ら初年兵五十人は第一中隊兵舎前で止まった。清水中隊長の訓示の後、兵舎内に入り各班に分かれ軍隊生活の第一歩である。約一カ月余り基礎訓練中に私の体重が一割以上減り、医務室へ入室を命ぜられたと同時に衛生兵教育を受けるよう進路を指示されたが、教育も受けず、また体重も増えず、多分肺結核と思っていた。別の病棟に移され、一期の検閲を受けることもなく、また二站陣地の戦車壕掘りにも参加せず、毎日のように馬の牧場で馬の監視であつた。

八月九日十時過ぎ、敵か味方が飛行機の爆音を聞いた。これはただごとではない、不吉な予感がして急ぎ医務室へ帰った。古年兵の戦争だ、早く中隊へ帰れと指示を受けて中隊に戻って、十人ほどの戦友が今夜は地下壕陣地に入るとの話で、その準備に追われた。

夜になって約百人の兵隊が帰ってきた。その夜は地下陣地の入口近くで夕食を取った。戦争になったのであろうか、副食品は牛缶や鯖等がたくさん出た。酒も

出たがあまり飲めなかった。十日昼は、戦車の通る音はするが、陣地には来る気配はなかった。夜の食事は昨夜のとおり缶詰がたくさん出た。牛缶ばかり口に入れると舌がヒリヒリ痛む。夜になると東の方面は一面赤く燃えている。戦車の轟音が南の方に向かっていくように聞こえる。昼夜の区別なく続いている。陣地の東側を素通りしているようである。敵が陣地に攻撃してきたのは十三日から十八日頃までの間、何回となく攻め込んできたが、その都度撃退した。二十二日頃から敵は総攻撃をかけてきた。陣地内に迫撃砲がかなり撃ち込まれたようで、敵も陣地の中腹まで侵入して攻撃を加えてきたが、損害は少ないように思われた。

二十四日、朝から妙に静かな日である。昼ごろアドバルーンが陣地の北側に揚がった。アドバルーンには赤字で日軍降伏すと記してあり、まさか日本軍が降伏するはずがないと思っていたが、何やら日本が敗れた事実がわかってきた。定かではないが八月二十五日、陣地を下りた広場でソ連軍の武装解除を受けた。中隊長から、我ら日本軍は本日武器を渡して孫呉まで後退

する事を告げられた。もうこれで戦争は終わった、内地へ帰れるとほっとした。生きて帰れると希望が大きく膨らんだ。武器を捨て、一中隊は整列した。ロスキーのダバイダバイの声に急ぎ立てられて、五列に並びと言う。五列でないと人員が数えられないようだ。一列二列と数えてまた始めから数え直しである。こんな兵隊の国に敗けたのかと我ながら悲しい気持ちであるが、敗れたのだから、仕方ないとあきらめた。我々五百人くらいで一集団となり、前後左右自動小銃（マンドリンの形をしているのでマンドリンと呼んだ）を構えたソ連兵の警戒のもと孫呉へ後退した。途中異臭がすると道路の側溝にソ連兵の死体がそのまま放り出されている。馬の死体もところどころにあり、異臭は強い。戦争の悲惨さを身を感じた。孫呉には二、三日いたが、その間道路の補修等雑役の仕事をした。その間うわさが広がった。鉄道を利用して大連または釜山経由で日本へ帰る話と、シベリア鉄道でウラジオ経由、船で帰る話とあり、捕虜になるうわさは出なかった。

中隊より、いよいよ明日ブラゴエンスクまで出発する。それから先は分らないが、敗れたりといえども軍人の精神は敗れていない。統制ある行動をせよと内務班長より指示があった。我々は一千人単位で出発した。孫呉より国境の町、黒河まで約八十キロである。途中ソ連の警戒兵は空を飛ぶ鳥を目がけてマンドリンを射ちまくる。夜になって大休止となり、飯盒炊飯した。ソ連側から黒パンが支給されたが、まずくて口に入らない。戦友にあげたこの黒パンが一週間も過ぎると、なくてはならない食料で、何日か前のことを思い出して苦笑いした。軍隊時代は実にぜいたくであったと思われる。黒河まで八十キロを一昼夜で行軍したことになる。黒河より船で対岸のブラゴエンスクに渡った。

九月二日と記憶しているが定かでない。野原で一泊することになり携帯テントを張っていたとき、急に空が曇り、にわかになフタリンくらいの大きい（ピンポン球の半分）ひょうが降ってきた。間もなくやんだが、テントは壊れるし、野原一面ひょうが解けて水浸

しである。荷物を運んできた三頭の馬も手綱を切つてどこかへ逃げていた。テントの場所を変えて八人ほどがごろ寝である。

翌朝は雲一つなく快晴であるが冷え込みは厳しく、これがシベリアの九月かと先行き不安が感じられた。翌日ブラゴエシチェンスクの収容所に入った。我ら作業十一大隊九百八十人と聞いている。鉄条網は張つてあったが、望楼は一カ所だけで、警戒兵は正門の一カ所だけと記憶している。早速使役を命ぜられて、我ら第一中隊を中心に五、六十人ほど、公民館のような建物の広場の整地である。つるはし、スコップ、もっこで二百坪くらい高くなっている広場を平場にするのであるが、現在のように機械がなくすべて人力である。かなりの重労働であった。

種々雑役が毎日のようにある。一週間過ぎる頃からパン三五〇グラムの規定と聞いていたが、パンは無く、朝は大豆十粒の塩水、昼はそば粉のパン二枚かまたはジャガイモ二個が昼食である。東京ダモイまで船の順番がくるまで働けと言うのである。

ある日、夏場に船で運んだ略奪物資が野積みされてあるブラゴエシチェンスクの埠頭から、倉庫（一、二キロ内陸）まで荷物を運ぶという。一人四〇キロから六〇キロくらいの荷物を担いで倉庫まで歩く。途中中袋を持った子供たちが集まって来て、担いでいる品物をくれと言う。私は小豆の袋を担いでいたが、子供たちはナイフを持っていて切り裂くのである。私はタバコの交換を条件に警戒兵の見えない中程あたりで交換した。米俵を運ぶのは収獲がある。毎日ではないが十日間くらいの間三日ほど運んだ。運ぶ途中で米を抜き取ってポケットはもちろんズボンの中まで詰め込んだ。最初はズボンの下で固く縛って入れたため足が曲がらず歩けないので、膝の上でくり直して持ち帰った。衛門を通るとき身体検査があり、先頭の班長が衛兵と話し合っている時、我らは集団で衛門を通り、無検査で持ち帰った。再三このような事があり、中隊長各班長は随分苦勞されたようである。毎日の重労働で、ある工場の雑役、道路の整地等、約三ヵ月続いた。栄養失調等の患者が出始めてくる。我らの中隊で

は、九月に使役に出たとき持ち帰った米を飯盒炊飯して幾分かは飢えをしのごうができた。食事が終わるとシラミ取りである。入ソ以来一度も入浴がなく当然のようにシラミが発生する。毎日のように衣服を脱げば縫い目のところはびっしりシラミの行列である。見るたびぞつとする。襟を広げると一面シラミであり、これには嘔吐を覚えたが、シラミ退治しなければ夜は眠れない。

十一月十一日革命記念日は半分くらいは休みであった。入ソ以来、米のご飯が湯飲み一杯くらい配食されたが、実においしかった。おかずは鮭である。久しぶりに食事の味を十分感じたが満腹までには至らず、手持ちの小豆を煮て食べようとしたが塩がなく、さじ一杯がのどを通らず塩の重要な事をしみじみ感じた。その頃は給食は一日三食で量的には一食分しか与えられず、体力も衰えてきた。その頃から栄養失調等の病人が出始めた。我ら兵隊の体力は限界にきていたが、ほとんど休み無し。種々の雑役に使われたある日、整地作業で一本の竹のようなものでも三人掛かりで担ぐ始

末である。このような体力を考えると我ながら情けないと痛感した。ソ連当局は我ら抑留者に対して、給食にしても人間として対応しているのか、全く理解できない待遇である。

十二月に入って寒さも厳しくなる頃、三人（高田上等兵さん、東さん、私）に転属命令が出た。行く先は不明である。三人は十二月八日開戦記念日に朝トラックに乗せられ五時間走って止まった。所はあるソホーズの工場前であった。途中足が寒く凍傷にかかるのではないかと心配したが、事無きを得て助かった。この工場では三人は一般の民家に宿泊したが、一般の家庭でも戦争のために辛抱している状態がわかるほどで、ソ連国民の辛抱強さには驚いた。家族は夫婦と子供一人十歳くらいで、家財はベッド二つ、ベッドの下に衣類箱が三箱と炊事道具だけであった。ソ連人は混血の人が多く、人種差別感がなく、我ら抑留者も同僚として接してくれたので助かった。給食は朝夕は民家で、昼は工場でパンとスープであり、一般人と同じ待遇である。洗濯も十分できたし、シラミとは縁が切れて普

通の生活に戻れた。この工場では五、六十人が働いていたが、規律は厳しいようであった。ある日、能率が上がらず、工場の責任者は他に連れて行かれた。新しく来た責任者は、ノルマが上がらなければ皆監獄だと、両手の中指と人差指を重ねて牢獄の真似をして見せた。実際かなり厳しく、ソ連国民は法律に添って仕事、生活をしているように思われた。この工場に来て、食事に困ることはなく三カ月余り過ぎた。

二十一年三月末、本隊への復帰となり十一作業大隊に帰った。帰隊してみると、大隊九百八十人のうち二百三十人栄養失調に加えてチフスが流行して死んだと聞いた。医者に診てもらわない者は二、三十人だと言う。昨年十二月本隊を離れる時の給与状態を思い浮かべると、このような結果になることが想像される。全く人間扱いされていなかった。一週間ほど過ぎて病気が上りの兵隊四十人と共に、農場作業にトラックに分乗して半日がかりで行った。この農場（コルホーズ）で、主にジャガイモ、トマト等の野菜も収穫した。主食は芋で空腹は感じることなく、冬場は芋の選別とま

き取りで、この農場で一年三カ月過ぎた。

食料はあるし仕事は農作で平穩に過ぎた昭和二十二年七月に、他の収容所より民主教育と称して一人の兵隊が来た。今まで民主教育はなく、平穩な日々であった。その教育に來た兵隊が帰った翌日、四十人の中で一人がダモイ東京ということになった。警戒兵一人付きでトラックで出発して、ブラゴエから汽車に乗り換え、東へ東へと進んでいたが、自分一人ではどうもおかしい。一緒にいる警戒兵も仲良くなり、なぜ一人ダモイなのか聞いたが、ハバロフスクでみんな集まってダモイ東京だと言うのである。ハバロフスクの収容所に着いた。入口には壁一面民主主義のポスターが張りつけてあった。ポスターの中には実に過激なものもあり、これが民主教育かと思われた。私は西沢班に編入され、ハバロフスクで五日ほど過ぎて、三百人ほどでナホトカに向けて出発した。

今までにダモイ東京と何回もだまされてきたが、今度は本物と思われた。列車は何日乗ったか忘れたが、昼前にナホトカに着いた。駅から港の見える所で下

車。すぐ近くに兵舎が並んで建っている、その広場へ集まった。間もなくソ連の将校が来て話があった。通訳は日本の民主教育のリーダーらしい男が通訳した。説明によると、今日現在日本から船が来ないので、船待ちの兵隊であふれている。泊まる兵舎もない。一週間ほど近くで伐採作業をするとの説明である。ああ、まただまされたと思ったが、とにかくナホトカまで来たのだからそう遠くはなく船に乗れると自分自身慰めて、また列車で逆送された。

夜着いた所はスーチャン（後で知る）である。歩いて二十分間で収容所に到着。食事のパンが終わって床につく間もなく銃声が聞こえた。すると、助けられ、助けてくれと叫び声がする。近くの畑で何か野菜でも盗りに入ったのであろう。警戒兵が大声で呼んでいたが捕まったようである。翌朝、我らが作業に出るとき、トラックの荷物の上に兵隊が乗っていたが病院へ行くらしい。後で聞いた話では、足を撃たれたが命に別状はなかったようである。ソ連ではどこでも、少しでも荷物がある所は一晚中警戒兵が銃を持って立

哨している。一般人でも盗む者は銃で撃たれる。ソ連は、法律の厳しい国である反面、盗みかっぱらいの多い国でもある。

スーチャンでは二、三日小高い山に登って倒木の後始末をしてから製材所のボイラーのまき割り、まき運びの労役に就いた。七月より三カ月間が過ぎた。その間の給食はパンとスープで充分でない。畑の芋を盗んだり、川で魚を獲ったり（川幅五、六メートルに紅鱒が群れを組んで上ってくる）、なかなか上手に獲れなかったが、楽しみの一つであった。松笠の実も食した。大きさは落花生くらいで味も同じで、食べ過ぎぬように気をつけたが栄養は充分あったと思われる。十月も半ば過ぎにダモイのためナホトカに行くとのこととで収容所を出た。今度は間違いなく帰れるだろうが、まだ安心はできない。心の中は複雑であった。

ナホトカに着いた。民主教育もなく、二、三日して興安丸に乗船する事ができた。日本人の船員、看護婦さんの出迎えを受けた時、初めて日本へ帰れると思っ

昭和二十二年十一月二日、船は舞鶴に入港した。周りの山々の景色を眺めながら、祖国の土を踏んだ。

私は過去を振り返り、入ソ以後九百八十人の作業大隊で二百三十二人の犠牲者が出たのである。

母を想い妻や子供の夢を見つつ無念にもはかなく散っていった多くの犠牲者に、衷心より哀悼の誠を捧げ、ご冥福をお祈りします。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年二月二十三日

住所 滋賀県長浜市一の宮町

本籍 滋賀県八日市市岡田町

入隊 昭和二十年三月五日（広島集合）

三月十二日瓊瑋六一二部隊入営

入ソ 昭和二十年九月

抑留地 プラゴエシチェンスク、スーチャン

作業 道路作業、伐採、農作業

引揚げ 昭和二十二年十一月二日舞鶴入港

復員後は会社勤務を経て昭和四十四年独立し、イン

テリアの会社を経営、現在は息子さんが代わっている。

（滋賀県 村田 健造）

我が人生

滋賀県 高田 義信

大正七（一九一八）年八月二十七日 滋賀県長浜市

下之郷町に生まれる（男五人の末子）。家は

天鷲^{ヒコドリ}絨織業。

昭和八（一九三三）年三月 長浜市神照小学校高等

科卒業

昭和十一年三月 県立長浜農学校卒業

昭和十三年三月 青年学校教員養成所卒業

昭和十三年四月 公立老蘇青年学校就職

同年八月 徴兵検査で第一乙種合格

昭和十四年一月 同校休職し敦賀歩兵十九連隊に入

営